

光明第十九号

様

住岡 狂風

□ H・M 様

『この頃妙に気になってしかたがありません。あせるのです。私が人間として貧弱であることがしきりに気になるのです。どうかして、有効な自信のある生活、努力がしたい。気があせって仕方がありません。三年生頃までは私は完全な人間であると強げな自信をもっていました。しかし、それは今もうみじめに壊されてしまいました』と。

その気分、私も常にそんな気がします。いえ、まだあなたは最初の経験です。幾度か、倒れ、壊されて、忠実にはねおきて、飛びおきて、地震の様な激動、暴風の様な破壊の後に、真実の静けさ、本当の自分を見出すのです。教壇に立った最初の感激敬虔を一生あなたの尊い宝として、お進みなさい。

□ △△様、「わたしには、とても百分の一の実行も出来ません。わたしの弱さがしみじみと悲しく」とのお考え、うれしく、感じました。実行の出来ないことはとても同じことです。実行の出来ないという悲しみは、無自覚のため呑気なのより、どれだけ尊いでしょう。『且に道を聞けば夕に死すとも可なり』とか。悲観せずに、一步一步お進みなさい。今晚もまたあゝうれしい幸福な気、筆をおく。(九月十三日)

乃木大将

私は「乃木大将」という書物を読んできました。知らない間に、頬を熱い涙が流れていました。明治四十五年七月、日本国民は、比類おわせぬ明治大帝を失い奉り、津々浦々の賤に至るまで、慟哭の涙枯れず、諒闇の愁雲低くたれて、七千万の同胞憂愁悲痛の思いに、今日九月十三日、いよいよ今宵は、御霊じひん殿を離れて、九重の奥永へに出でますの日である。天地寂として声なく、万頼死して、人皆哀痛にむせぶ時、御発引の号砲天地に轟き、部下の寺院の鐘一斉に鳴って腸をえぐる時、ああその時、私たち日本人は、大きな偉人、神の様な崇高の人格、無類の忠臣、乃木大将その夫人静子君を失いました。

辞世の歌に、

「うつし世を神さりませし大君の

みあとしたひてわれは行くなり」と。

何という高調でしょう。何という哀韻でしょう。熱涙のほとばしるを禁ずることが出来ませぬ。大将の一生は、「お国のため」「天皇陛下の御ため」この一語につきていました。大将こそは、我が大和民族の真髓のあらわれです。その一語、その一行為すら、ことごとく私たちの教訓であります。その一つを聞いてさえ、冷汗が出る様な気がします。大将の様な、高潔な、純忠な方がどこにあるでしょう。大将の様に、武士道的な、大将の様に、質素な、大将の様に、血あり涙ある方が、大将の様に、実行的な、大将の様に、厳格な方がどこにあるでしょう。

黒岩周六氏は「乃木將軍は実に楠公以後の第一人なり。彼は、人たるより神なり。」と言われました。雑誌「日本及日本人」の上で市村博士は、「生きてだに死にたる人の多き世に 死にて生きてきたる君ぞたふとき」と詠じられました。「剣を佩おびたるペスタロツチ」と言つた方もありました。日本歴史の存する限り、大将の人格は生きています。

それにつけても、大将が自殺の前に（九月九日）東宮殿下に奉られた「中朝事實」という書物のことあります。大将は殿下に奉呈して、色々と、この書のことを申し上げられたそうです。「中朝事實」は、山鹿素行先生の著述であります。山鹿素行先生は、かの四十七士の首領大石良雄の先生であります。四十七士のあの美しい仇討のかげには、山鹿素行先生がいられたのであります。乃木大将は素行先生を崇拜せられ、「中朝事實」には自ら朱を入れて読まれたそうです。乃木大将は、松下村塾で吉田松陰先生の教えを受けられた。松陰先生もまた常に、四十七士のことを言われたそうです。

素行先生、大石良雄、松陰先生、乃木大将、時代はちがっても、時勢はちがっても、その間に一貫した誠の血が流れていると思えば、私たちは、何かしら大きな大きな、私たちの内に得られたものがあるのを感じます。どん底から、私たちの自覚を叫びます。（九月十四日）

巻頭の叫び

□偽く心即ち墮落

我々一つの過ちあり。それを偽いて通らんとする心即ち墮落である。自分のした悪が自分の口によつて都合よく言いわけされた時、ホッと安心する心、即ち墮落である。第一の虚言に失敗した時、更に第二第三の虚言によつて悪を隠さんとする心、即ち墮落である。自己の心霊の行くべき最善第一の道を示せる時、我が勢いにまかせ、好みにかこつけ、我がままに従い、ことさらに、言いわけを作つて第二第三の道に行かんとする心、即ち墮落である。自己の真生命を偽らんとする心と戦え。これ向上の第一義、自己覚醒の第一歩である。

□運命を呪う者に与えられるものは死のみ。「汝いたずらに悲しむなかれ。」積極的に進むことを忘れて、消極的に我が運命を呪い悲しんではならない。幼くして親を失つた寂しき、子を失つた悲しき、貧家に生まれた悲しき、その他全ての不可抗力な汝の運命は、汝の知らざる力である。人生行路の重荷は汝一人の所有ではない。たとえ汝の重荷を甲乙の重荷と取りかえんとするも重荷は即ち重荷である。運命を呪うよりは、運命の内に新しき我が生命を見出さねばならぬ。運命を呪いて悲しめば死するにしかず。いたずらに運命を悲しむよりは、体の弱き者は養生につとめよ。親に別れ子を失つた哀寂の情は、直ちに、その心移して、世の自己の如く哀れなる者を慰めんとする尊き同情に更えよ。貧しき者は、貧しきになれた強き心と体を以て、汗の生活に突進せよ。ここに運命を超越せる自由なる新しき汝を得るだろう。

一路向上の門出

□破壊と建設

世の中の進歩は、破壊と建設によつて出来て行く。古い無益な、あるいは有害なもの、一方からドシドシ破壊されて、一方では、新しく新しく進歩のともなつた建設が続けられる。破壊も必要であるし、建設も必要だ。古い人は破壊を喜ばぬ。いわゆる保守的だ。若い人は容赦もなく破壊を続けて、新しいものに移ろうとする。双方ともに必要である。

けれども事の破壊は、それが何かより以上進んだものをうちたてることを目的としたものでなければならぬ。建設を眼中におかないで、口を開けば、破壊、人の説には悉く反対し、口論に花を咲かせて、自ら快しとする者がある。彼らが真の新人だろうか。非と知り悪と知つて破壊し得ざるは、心の弱き者、事なきに事をおこし、我を通さんがために、破壊に急ぐ者は、勇気あるが如くにして勇なきもの、共に事を計るに足らない。全てを好意に解し、熱せず、雷同せず、正しきにくみし、邪を倒して、一歩一歩建設に急ぐ者は、これ向上の一路をたどる人か。

□この一歩即ち人生の岐路

青年壯年をかけて、私の尊敬する人はかなりたくさんある。△△さんは、まだ若い方だ。けれども一党一派に凝らない公平な、そして着実な、綿密な人である。時間が正しい。金銭出納が綿密で、人に対しても做らない、そして何時も変わりのないよく出来た方である。ある夕方学校に来られた。そして、「子供が忘れ物をしましたから教室に入らせて下さい。」とことわつて、教室に取りに行かれた。取つて来て、長い間話して帰られた。無断で教室に入つて出て来て話をするのと、断つて入るのは、ほんの一分二分の時間の差と、事を前後に行うだけの違いだ。僕に取つては同じことだ。けれども、そこに、他人の責任の尊重と、公共物に対する大国民の品格が見える。この心即ち向上である。堂々たる人生歩みの第一歩である。

□仏か神か、鬼か悪魔か、ただ心の舵の取り方

一人の女が悪い顔してうつむいていた。

甲の女は、「どこか加減が悪いのだろう」と思った。乙の女は、「何が不気嫌なのだろう。いやな顔して、あんな方が大嫌い」と言った。丙の女は「誰かと喧嘩でもなさつたのだろう。ブツブツ言つていらつしやる。そうだ、何時もの□□さんの悪口にちがいない。□□さんに言つてあげよう。」丁の女は「何か心配していらつしやる。慰めてあげよう。『もし貴女どうなさいました。何か御心配でもありますか。お体でも悪いのですか。』」

一人の女は、顔をあげて、「ハイ有難うございます。今、国から母の病気が急に悪いと言つて来ました。」丁の女は「あ！　そう、御心配ですね。それではすぐおかえりなさい。後は私が引き受けます。」

一人の女の顔色について浮ぶ四人の想像は皆ちがう。悪く思うは、思う者の悪く濁れるためである。

鬼か仏か 心の網のひきかたのみ

□ 中年以上の婦人

三十から五六十迄の女が四五人集まった。

呪いと、怒罵と、皮肉と、ひねくれと、悪口とが彼らの世界か。悲しき空虚な、甲斐なき彼らの世界よ。自覚もない、光明もない。肉体に縛られた精神は、我執の強い意地、貪欲、悪魔の様な呪い、邪見を、その育てる子供と隣人とに焼きつける。信仰のないその沙漠の様な生活よ、彼らをにくむよりも、理想も憧れもなくなった彼らの現実を悲しみ、彼らを産む社会が悲しい。

□ 高らかに歌え！

幼児は、時間を考えない、青年は、時が待たれる。壮年は、時の行くを思い、老年は、奔る如く飛ぶが如く、時の過ぎ行くを悲しむとか。

処女よ！ 青年よ！

私たちの生活は全てが詩であり歌である。冷たき石も、青い木も我らが前に躍り、我らの内に歌う。且の露も夕の月も優しき雅の涙催おす詩であり歌である。心は高く空にはせ、赤き清き溢れる血潮は、体中にみなぎっている。

青年よ！ 処女よ！

現実のその若い力、その美しい情の続くかぎり、歌え、歌え、高らかに。

青年よ！ 処女よ！

疑わざる正しき心よりほとぼしる愛の泉、暑さにも寒さにも辛さにも堪え得る固い意志。流せ、清い涙を。流せ、清い汗を。その涙と汗は、人生浄化の涙と、社会の向上と、汝の創造になくてはならぬ汗とである。

中年者の、現実に関われた悲しい実利と、弄る生命の輝き失った生活を考える時、今の内、今の内、私たちは高らかに歌いつつ、打ちならす太鼓の音勇ましく、一歩一歩進むのだ。人生文化の向上に。

□ おおこの涙！

八月三十日、私たちは我が村の凱旋兵士を迎えた。その内には、我が親愛なる団員仲本幽葉君もおられた。仲本君は、凱旋兵士諸君にかわって挨拶をせられた。その途中、君は「私たちは今日こうして、皆様に迎えられて、皆様の美しい顔に接することが出来ますのに、」君は急にハンカチを顔にあてて涙の人となった。「私たちと一緒に出征したあの河野君は不幸にも敵弾のために、今も病床に呻吟する身となって、今日私たちと一緒に皆様の美しい顔に接することが出来ません。私たちは、・・・河野君の事を考えると断腸の思いに・・・。」一同を打った様で思わず熱い涙が頬を伝わった。

そうだ河野染市君は、腰に弾丸を受けて、もう傷は癒えたものの腰骨は、金のかすがい三本で骨をとめてあつて、歩くことすら出来ない。一生を廃兵として暮さなければならぬのだ。国家の犠牲、国民の身代り。ああ私たちは、相すまぬことだ。

戦友の負傷に断腸の涙をそそぐ仲本君のその同情は、生死の境を共に馳せ廻った兄たちの雄々しも又優しき大和魂の表われだ。私たち国民の眠りは、あゝその清い涙によつて醒される。

□死んだあきらめではない

わたしたちの求めるものは、死んだあきらめではない。親鸞の信仰の型を倣うのではない。キリストの天国に、キリストと一緒に同居しようとするのではない。私たちの心霊の奥に点された光明の輝きに生きようとするのだ。大学の仏教講座の哲学が如何になろうと、世界思潮の焦点が何だろうと、私たちの信仰に変わりはない。私たちは永遠に、自己の内的革命に、自己の真生命に生きてたよ。命ずるままに、この手は、自己のために、親のために、兄弟のために、社会のために、人のために、使われていたらよいのだ。

呪われた運命

若い女教師の死

同胞よ。私は、呪われた運命の若い女教師の死について語らねばならぬ。本年三月女子師範を出た、快活な、気持ちのいい、誰にでも隔てなく語ることの出来る、しかも志の確固たる末頼もしい二十歳になった彼女は、一切を秘密の内におさめて、八月の初め、咲きほこる花の様な心と体を、一匙の昇汞によって殺してしまったのだ。

彼女は自殺の前日、一切の手紙、一切の書類をみな焼いてしまった。自殺の当日は平気で学校に出た。授業をすませて、事務もとつて為すべきは全てなしおわって、下宿に帰った。

彼女は、体を清め体中に香水をぬった。新しい襦袢、新しい単衣、新しい袴を着けた。彼女は水をくんで来て、かねて用意してあった昇汞を出した。昇汞は紙の中にひねってあった。口にくわえて、喰いちぎって、紙でまるめられたままを水と一緒にのみ下した。平素薬を飲まない彼女のこと、宿の主婦は、「何を飲みました。」と問うた。「昇汞」と彼女は答えた。主婦は驚いて、はかせようと飛びついた。口に指を入れて、咽喉まではかせた。彼女は急に、指を食いしめた。指は、ちぎれそうだ。指を出すと又のみこんだ。主婦は走った。学校から、職員が行く、町の人々が走る。人々が騒ぐ間に、彼女は、寢床をしいて、白い敷布の上に静に横になった。両足を揃えて、両手ののばして、不動の姿勢を取った。

かけつけた人たちが、毒薬に卵がよいというので、無理に口に入れても、のみこまない。口に指を入れさせない。時々目をあけるのみで口をかたくくいしばって、身動き一つしない。一分二分、彼女は、二三度手をひきつけた。それきりで、まだうら若い純潔な彼女の玉の緒は絶えてしまった。奇麗な死に様だった。

電報が飛んで数時間、その寝た様な死人の枕頭には、僕と同期に卒業して、兄弟の様に親しかった僕の友人と、死んだ彼女の姉とが、涙にくれて坐っていた。

翌朝、彼女は火葬にされて、一片の煙となってしまった。彼女の姉や僕の友人や、彼女の知人などが、骨を拾いに行つた。藁灰の中には火が見える。その中には骨が見える。姉は火の中に飛びこんだ。「花ちゃん！」と叫んで。後から知人たちは急に引きとめた。全ての人は泣いた。僕の友人も頭をうなだれて、涙潜然。しばらくは、骨拾いに手を下す人もなかった。

彼女の死の原因！ 同胞よ、当然それが聞きたいだろう。けれども彼女は死因について何も遺言しなかった。書きおき一本しないで、全ての手紙を焼いた彼女の死因については、徹頭徹尾わからないのだ。けれども世の人たちは色々な想像や噂をつくつた。ただ僕は彼女の生前について語らねばならぬ。

彼女には、姉と母とがあつた。

僕の友人に、兄弟の様に親しかった同期卒業の真面目な温謙な青年教育家がいる。この友人は、前から、妻を物色していた。ちょうど、彼が出ている学校の校長が、或女を周旋してやろうと言うので、色々たづねて見たが、全てが気に入って、それをもらうことに決心した。そしてその女は実に死んだ彼女であつたのだ。

彼女の姉たちは、その申し込みに、すぐ賛成して、彼女には聞かせない先に、話をきめてしまった。そして、姉たちは、妹にむかつて、僕の友人のところに行くのだと言つてきかせた。彼女とても新しい時代の教育を受けた女である。彼女は姉に言った。「それは、あまりではありませんか。私の結婚問題を私に知らせないで決めるとは。私の知らない問題です。私は結婚いたしません」と。

けれども死んだ彼女は、姉によつて教育され、姉によつて勉強させられた義理がある。無断で決められた結婚に従うのは不平でも、それより重い義理がある。義理に対しては我まは言われない。

彼女は「ともかくも男が知りたい。あるいは立派な男子かも知れない。」と言つた。そして彼女は、男との間に文通することをゆるされた。週に一通が二通になり、三通となり、ついには毎日の様になつた。

二人の間は熱して来た。彼女は彼を理解し、共鳴し、彼は彼女を理解し共鳴した。初めは姉によつて強いられた二人の間も、今はもう結婚によつて、幸福を得られる自信がついた。結納の取換しもついて、八月中には結婚式があげられる準備になつた。

さて又ここに、彼女の姉は家の相続者であつた。婿をとらねばならなかつた。そして、その婿も探し得たのだ。その姉婿も亦不思議にも、僕の友人で同期卒業の教育家であつた。事は悉く都合よく行つた。けれども好事魔多しの譬。ここに書かれた二人の婿について語らねばならぬ。二人は共に僕の友であるけれども、この二人は、在学時代に事の外の仲悪だつた。二人は敵であつた。卒業して、ここに数年二人の間の9情はやはり同じことであつた。二組の結婚がこのまま運ばば、二人は義理の兄弟にならねばならぬ。

「兄とは言わん。」「弟とは言わん。」「二人の口から言われた。死んだ彼女がもし結婚すれば、恩ある姉に叛かねばならぬ。と言つて今更一度愛しあつた彼と結婚しないで他に行くことは出来ない。彼女は煩悶した、苦悩した。彼女の死んだ二日前、彼女は姉から黒ぬりの葉書に、命令的な冷やかな文句のならんだ便りを得た。(何が書いてあつたかは、想像にまかす)。人にも相談した。解決はつかない。彼女は終に死んだ。

同胞よ、これが死因か何か、幽明境を異にした今、彼女から聞く由もない。世の中の人間は、彼女のあさはかを笑う者もあつた。姉の仕打ちをにくむ者もあつた。彼女をほめる者もあつた。彼女がもつと強い女であつてほしいと言う人もあつた。僕は何も言わない。

ただ同胞よ、私たちは、別々な思いで、この一つの小説の様な悲劇から、数個の生きた教訓を得ることが出来る。そして、又かかる悲しい事実(原文不明)……皆全ての人間が負わねばならぬ責任なのだ。せめて、知らない彼女のために、私たちは、一滴の清い涙をそそぐことによつて、彼女の死に意義をもたせ、その霊を慰めたいと思う、自殺の可否はほつておいて。

心霊の奥殿おくに輝ける汝自身の実相すがた

その前にぬかづけ

懺悔に泣く監獄の囚人の様に、一人の人間が、秋時雨の夕べ、静かに静かに寂しき、悲しさを思う時、そのやるせない人生の寂しき、その言い様の無い、霊の動揺、焦燥をじつとじつと静かに味わって、一人黙想する私に、次第次第に、苦惱から平和に、悲哀から平和に、そしてその次には、幼子が乳をくわえた時の様な、広い花咲く野原に出た様な、懐しきと、温みと、くつろぎと、慰めと、感謝とを与えてくれる者は、一体何者だろうか。

自分の外を見たら見つからない。私の内を見よ、汝の内を見よ。心霊の奥殿に点された光、その殿堂に坐っている権威者、それこそは、汝を真実に裁き、汝を真実に叱り、汝を真実に罰し、汝を真実に慰め、汝を真実に愛し、汝を真実に認める汝自身の姿である。

私が一つの悪事を考え、罪を犯し、嘘を語り、正義を蹂躪ふみにじった時、私たちは、その事の未だ終らない内に、冷たい鉛の様な、鋭い剣の様な、裁判の前に立たせられる。そして、後悔する。

神官が神の前にひれふす様に、私は、真面目に、真に自我の前にひれふし、ぬかずかねばならぬ。私たちの救われる道は唯そればかりだ。「悪かった。悪いことをしました。」深い、固い、懺悔に心がみちた時、真実の裁判に従った時、今まで、冷たかった厳しかった心霊の殿堂に座をとる汝自身は、直ちに、忽ち変わって、罪に服した私の哀れさを慰さめる仏となる、神となる。

たとえ私がその為した悪事のために、世の中千人の人に笑われても、打たれても、敵にされても、にくまれても、汝自身を守り、慰め、力強く再び新しい道に進む力を得ます。私たちが悪かった時、その裁きに従わず、ことさらに、言いわけや、ごまかしやによつて、心霊の光を暗くらまして、悪に悪を重ね、懺悔のかわりに、悪に強い悪魔の心をおし通すならば、私たちは更に、第二第四の悪によつて、進まねばならなくなる。殿堂の扉は閉ざされて、私たちは、漂浪さすらいの旅に上らねばならぬ。他人が褒めるが故に善と思ひ、他人が悪く言うが故に悪いと思う。第一義的な生活はここに滅んで、醉生夢死の浮き草のような、暗い旅にさまよう。

「月見れば千々にもこの悲しけれ 我が身一つの秋にはあらねど」
悲しい人よ、他人の前で泣けば、笑うか知れない。心霊の殿堂の前にひれふして泣け。泣いたその後、悲しさのその後、氷が水に、水が湯にかわる様に、徹底的寂しさに泣いた心は、不思議にも、その広い砂漠の様な寂しさの中に、ズーツと湧き出して来るうれしき、にぎやかさ、のどかさ、何とも言えぬ温かさが知れて来る。

私たちの智慧が足りないでしくじった時、恥を受けた時、腹を立ててはならない。自暴をおこしてはならない。心霊の殿堂の前に立て。

心霊の殿堂の叫びには「汝は未だ足りない。努力が足りない。」「今から新しい奮闘の道に出よ、そして、汝の恥を取りかえせ。汝の心が理想に燃え、努力に進むなら、恥を恥と思うに足らぬ。いざ新しい力を与える！」とあるにちがいない。

同胞よ、今こそ私たちは、悪いにせよ、善いにせよ、あまりに外を見すぎている。私たちの内にかえろう。

精神的に生きることだ。精神の内部に自覚も慰安も何も含まれている。私たちの言う精神生活は物質生活を否定するのではない。全てを含み、全てを超越とびこえるのだ。物質生活は、生活の全体ではない。主眼ではない。一生の間、我々の努力、自己の發揮のため全生活を統御せよというのだ。

金は一文なくても俺は俺だ。悲しんではならぬ。自分を賤しんではならぬ。万円あつても俺は俺だ。そのために、自分を乱したり、倣つたりしてはならぬ。そんなもので自分に価値をつけようとしたり、自分を軽んじてはならない。

心室の奥殿にかがやく我を良心と言おうか。

あまりに軽い意味になつてしまう。

神や仏と言うか。

我をはなれて存るのではない。

我々がその前にぬかずき終えた時、

あゝ、そは我の悟であろう。